

まじふ

Vol. 17 No. 2

2020. 8. 2

「賜物を活かす時が来た！」

主任牧師 中島 聡

「主は言われた。『わたしはあなたの前にすべてのわたしの善い賜物を通らせ、あなたの前に主という名を宣言する。わたしは恵もうとする者を恵み、憐れもうとする者を憐れむ。』」

出エジプト記 三三・一九

七月一〇日をもつて屋内外を問わず集会の規模が五千人（或いは収容人数の五〇％）まで緩和されることになり、日本の日常、教会の礼拝、諸集会も徐々に元に戻っていくことができるかと思つていたら、都市部において感染者数は増加に転じ、地方においては、今度は大雨による水害に多くの人々が襲われています。二〇一七年・九州豪雨、一八年・西日本豪雨、記憶に新しい昨年台風一九号は関東、福島に大雨をもたらし、私たちの教会、幼稚園も少なからず被害に遭い、ようやく修復したところでしたが、今年になってまたも九州地方が大雨洪水によって甚大な被害を被つてお

り、今なお被害の全容が掴み切れていない状況にあります。

新型コロナウイルスに気をとられていたわけではありませんが、ここ数年、毎年“五十年、百年に一度の雨量”、“観測史上最大の雨量”に襲われ、河川の氾濫、家屋浸水、土砂災害が連続して発生することが予測できている事態に対して有効な手立てを立てられないでいます。氾濫をもたらすのは地上の川ですが、線状降水帯とは大気の中に「もう一つの川」が流れているようなものであり、今回の豪雨をもたらした大気の流れは、全長約三千km、幅約六百km、厚さ約三kmにおよび、その水量（雲に含まれる水蒸気を水に換算した場合）は、日本一の流量を誇る信濃川の八百倍であったそうです。こうなると、私たちの手に負えない状況であり、私たちの信仰とは一体何であるのかと、つくづく思われます。

しかし、そもそも聖書における信仰の歩みは、そのようないわば限界状況の中であつたことが示されます。イスラエルが「信仰の民」として選ばれたのは、出エジプトの荒野野の中、いつどこに出口があるのか分からないまま、ひたすらに彷徨つている時でありました。イエス・キリストが福音を説き明かされたのは、「山上の説教」においても、「五千人の給食」においても、まるで「飼い主のいない羊の群」のように、病に苦しむ、その日の食事も用意でき

ない状況でありました。手に負えない、絶望してしまふような状況ですが、イエス様は、「あなたがたは幸いである」と宣言されました。そして、たった一人の少年の、たった一つの弁当を受け取られると、「感謝の祈り」を捧げ、「三十倍、六十倍、百倍」にして、群衆を満ち足らせ、祝福されました。

信仰とは、どのような状況にあつても、イエス・キリストを信じて、自分に与えられている賜物を捧げることができると懸かっています。たとえそれが「弁当一个分」であつたとしても、主イエスが必ず祝福してくださるのです。主は、「あなたの前にすべての善い賜物を通らせる」と言われます。それはなんと、主御自身のことであり、「昼は雲の柱、夜は火の柱」（出エジプト記二三・二一）として主が共におられることを意味しています。

確かに困難な状況があり、私たちの手に負えない事態が続いています。つい「何もできない」と思つてしまふかもしれません。しかし、主は、たとえ一粒の種でも、一個の弁当でも祝福して、恵みの奇跡をおこしてくださるのです。「この状況に立ち向かえる賜物など無い」と思つてしまふかもしれません。しかし、主御自身という最大最高の賜物、聖霊の力が私たちと共にあるのです。聖隷横浜病院における「楽しい音楽とリラクゼーションのひとつ」の再開は見通しが立ちません。しかし、諦めるのではなく、「では教会で開催できないだろうか」

「主が共におられ、私たちを福音伝道のために用い、導いてください」と祈り始めることが大切なのです。

今こそ、私たちに与えられている賜物を祈りによって活かし、全能にして万軍の主の賜物を活かしていただく時なのです。礼拝、祈祷会を守り、主の御名を賛美し、祈って参りましょう。ハレルヤ！



「生活必需品」の話

片平 貴宣 牧師

もうほとんど解消しましたが、コロナウイルスの影響で生活必需品が手に入りにくい時期を私たちは経験しました。まずはマスクに始まり、消毒液、そしてトイレットペーパーやインスタント食品、はたまたなぜか納豆などが店頭から姿を消しました。

今から振り返ると医療品などは必要があるわけですから需要が高まるのはわかりますが、トイレットペーパーや納豆などは結局デマだったわけで、多くの人が不安をいだき、生活に必要なものがあるうちに買って置く、買いだめに走りまわりました。もちろんそれは「生活必需品」なので、誰しもが必ず必要です。必要なものを、必要な分だけ、必要としている人にお届けできるのがベストですが、残念ながらそのバランスが崩れてしまっていたわけです。

聖書にも似たような場面が出てきます。ヨハネによる福音書六章で、主イエスは五千人の給食の

奇跡を行われました。そしてその後、弟子たちにその奇跡を通して何を語ろうとしていたのかを示されます。主イエスは「わたしは命のパンである」と語られましたが、弟子たちの多くはその意味を受け止めきれず、離れ去っていった、と書かれています。

主イエスと弟子たちとの食い違いはこうあります。『すると、イエスは言われた。「はつきり言っておく。モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではなく、わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる。神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである。』そこで、彼らが、「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と言うと、イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渇くことがない。』」

(ヨハネによる福音書 六・三二―三五)

弟子たちは主イエスの行われた奇跡を身を以て「体験したにもかかわらず、その意味を受け止めきれませんでした。むしろ彼らが必要としていたのは、日々の食べ物でした。もちろんそれは私たちの地上の営みにおいては必要不可欠です。けれども私たちが心に留めておかなければならないのは、食べ物や日常生活に必要なものは、「地上生活必需品」と言うことです。

ネットで見かけたジョークのような画像でしたが、人々の多くは「安全(Safe)」を求めてそちらへ向かい、「救(Save)」は誰も求めていない、そんな有様でした。

私たちはどうでしょうか？この地上においては「安全(Safe)」ももちろん大事です。ですが、本当に大事なものは、「救(Save)」の方なのです。私たちが天に目を向けるとき、そこに行くために何が必要か、地上とは価値観が逆転をします。地上で必需品だったものが、天においてはまるで価値を持ちません。

「天国生活必需品」こそ「救(Save)」であり、主イエスの十字架のほかに救いはない、と私たちは信じています。そして、「天国生活必需品」は「信仰生活必需品」でもあります。私たちはこの地上にあつても「救い」を受けたものとして、ふさわしく歩ませていただきましょう。

動画はこちら ↓

